山と博物館

第５４巻　第７号　２００９年７月２５日　市立大町山岳博物館

動物写真展『ふぞくえんがやってきた!!』

市立図書館にて

美麻小中学校にて

めくってみよう！

山岳博物館の付属園で飼育している動物のほとんどは、北アルプス山麓に生息する動物です。市内の子供たちに、自分たちの身近にいる動物に興味を持ってもらい、実際に生きている動物たちを見に付属園を訪れてもらいたいという思いを込めて、新企画『ふぞくえんがやってきた!!』を開催しました。

この企画は市内の小学校の掲示板や廊下、また市立図書館の一角を利用して、普段動物たちと一番身近に接している飼育員だからこそ撮影できる、動物の特徴や性格をとらえた写真を展示しました。また、ただ写真を見るだけではなく、質問が書かれた写真パネルをめくると、その下に正解の写真が現れるようなクイズ形式の展示も行い、子供たちが直接パネルに手を触れて楽しんでもらえるように、より一層興味を引き出せるように工夫しました。

展示を見た子どもたちからは、「これは僕わかるよ！」とか「へえー、知らなかった」と言った声が聞こえました。展示最終日には２枚のパネルをとめていた金具が広がってしまっているところもあり、多くの子供たちに楽しんでもらえた様子がうかがえました。また先生方からも、「このような展示をぜひまたやっていただきたい」との言葉をいただきました。

付属園に来てただ動物を見るだけでなく、動物の特徴や性格を知った上で、その動物に注目すると、一層親近感がわいてくるのではないでしょうか。子供たちがひとつでも多くの疑問を持ち、自らその答えを求めたならば、それは知識となって心の中に残ると思います。山岳博物館の付属園で飼育している動物は決して多くありませんが、「ニホンカモシカってこんな動物」というところから、「カモシカの○○ってこんな性格」というところまで、より深く踏み込んで楽しみながら学んでいただけたら何よりです。そして「また遊びに来たよ！」と、多くの子供たちが付属園を訪ねてきてくれることを願っています。

飯島志津　上良智　小嶋健太
（山岳博物館　動物飼育員）

島々から上高地に至る登山道沿いの山小屋

梅干野　成央

1　山小屋との出会い

国土の大部分を山地が占める我が国では、様々なかたちで山と結びつきながら生活がいとなまれてきました。標高の高い山々からなる山岳も例外ではなく、そこでは厳しい自然環境のもとに固有の建築文化が育まれてきたと考えることができます。この山岳という環境において育まれてきた建物を、山岳建築と呼びたいと思います。現在、主に山小屋に即して山岳建築の研究を進めています。

山小屋との出会いは、平成19年（２００７）の６月にさかのぼります。そのとき、私は上高地の明神池近くにたつ信州大学山岳科学総合研究所の上高地ステーションの修繕を行っていたのですが、時間の合間をぬって、学生と一緒に徳本峠にのぼりました。明神岳の雄姿を後ろにみながら、３時間ほどかけて登山道をのぼり、たどり着いた峠にたっていたのは、徳本峠小屋という名の山小屋でした。早速、小屋番さんにお願いし、建物のなかを見学させていただきました。簡素さのなかにも暖かみのある、質の高い建物でした。小屋番さんによると、この山小屋は、たてられてからすでに80年以上がたっているとのことでした。冬には建物が埋もれてしまうほどに雪が降ることは容易に想像がつきましたし、そのような厳しい自然環境のなかで80年以上も登山者の命を守り続けてきたこの山小屋に畏敬の念を抱いたことを記憶しています。

2　日本登山史の概略

登山とは「山に登ること」[1]を意味します。日本における登山の起源について、藤森栄一は昭和５年（１９３０）に八ヶ岳編笠山の標高約２４００ｍの場所で黒曜石の鏃を発見し、「これは当時の私たちにはまったく想像すらできなかった事実で、その石鏃を、この高いところまで持ってきた、おそらくは大きなエポックに価したであろう彼らの冒険と努力とにたいし、驚歎と尊敬とを惜まなかったものであった。この記録はその後今日にいたるまで、じつに私の知りえた最高の彼らの足跡である。おそらくは神秘な、一種信仰的な威圧をもって彼らの頭上にそびえていたであろう峻峯へ、鬱蒼たる原始林を、金属器を持たなかった彼らが、わずかに石でつくった貧弱な利器のみで切開いて、この高処に達したのである。その驚くべき忍耐と努力とは、当然、登山史の第一頁にあがなわれてしかるべきものに違いない。」[2]と記しています。こうして幕を開けた登山の歴史は、生業や信仰などと結びつきながら、脈々と育まれてきました。

近代になると、明治27年（１８９４）に志賀重昂の『日本風景論』[3]や明治29年（１８９６）にWalter Westonの『MOUNTAINEERING AND EXPLORATION IN THE JAPANESE ALPS』[4]などの文献が発表され、これらの文献に影響をうけた小島烏水らが明治38年（１９０５）に日本山岳会を発足させました。こうした背景をへて、山にのぼること自体によろこびをみいだす近代登山の風潮が広まりました。とりわけ、高山峻岳が密集している北アルプスは、近代登山の影響をとくに強くうけた山岳地域であるといえます。

北アルプスには、明治中期以降、登山者が著しく増加しました[5]。それに応じて、明治40年（１９０７）の白馬山荘の建設を皮切りに、北アルプスには多くの山小屋がたてられました。北アルプスを訪れる登山者は、昭和初期まで増加しましたが、日中戦争が始まると減少傾向に転じ、太平洋戦争の戦火が激しくなる終戦直前の数年は激減しました[6]。そのため、多くの山小屋は、この時期に営業されず、建物が傷み、たてかえを強いられたと考えられます。こうした歴史的な経緯をふまえると、終戦をむかえた昭和20年（１９４５）を山小屋の建物の大きな変わり目として位置づけることができますし、それ以前にたてられた山小屋の建物は近代登山初期の歩みを伝える文化遺産であるといえます。

3　岩魚留小屋・徳本峠小屋・嘉門次小屋

北アルプスにはたくさんの登山道が敷かれており、その沿道にはたくさんの山小屋がたっています。これらの山小屋について、終戦をむかえた昭和20年(１９４５)以前にたてられた建物が遺存する山小屋を調べました[7]。その結果、北アルプスにたつ１０６軒の山小屋のうち、16軒の山小屋がこれに該当しました。とくに、島々から上高地に至る登山道沿いには、このうちの３軒（岩魚留小屋・徳本峠小屋・嘉門次小屋）が分布していました。この、島々から上高地に至る登山道は、近代登山初期、上高地に入山するための本道であり、多くの登山家が通った由緒ある登山道です。また、この登山道は、中間地点の徳本峠にたったWalter Westonがその風景をみて、「The view from near the highest point of the pass is one of the grandest in Japan, so entirely does it differ in character from the ordinary mountain landscapes with their rounded outlines and verdure-clad slopes.（峠の峰付近からの眺めはこの国でもとくに雄大なもののうちに数えられ、他の山々の丸みを帯びた輪郭や斜面を緑の樹林で蔽われた景観とはまったく性格を異にしている。）」[8]と絶賛したように、類いまれな眺望

写真１：登山道からの眺望

写真２：岩魚留小屋

（写真1）を有しています。

・岩魚留小屋（写真2）／標高：1260m／建築年：明治44年（1911）以前／建築構造：木造

岩魚留小屋は、島々谷南沢岩魚留沢出合にたつ山小屋で、明治44年（1911）に民間に払い下げられた農商務省安曇小林区署の岩魚留官舎を移築して利用したことにはじまると伝えられています。[9]

・徳本峠小屋（写真3）／標高：2135m／建築年：大正12年（1924）／建築構造：木造

徳本峠小屋は、島々から上高地に至る登山道の最高地点である徳本峠にたつ山小屋で、大正12年（1923）に上高地温泉ホテルが徳本峠に借地をして小屋をたてたことにはじまると伝えられています。[10]

・嘉門次小屋（写真4）／標高：1525m／建築年：大正6年（1917）から昭和12年（1937）の間／建築構造：木造

嘉門次小屋は、上高地の明神池の畔にたつ、上條嘉門次に由来する山小屋です。嘉門次は、明治13年（1880）から上高地に住み、著名な登山者らの山行に山案内人として同行した[11]人物として知られています。

写真3：徳本峠小屋

写真4：嘉門次小屋

4 徳本峠小屋の原形と現形ならびに変容過程

島々から上高地に至る登山道沿いにたつ岩魚留小屋・徳本峠小屋・嘉門次小屋の建物を調べ、近代登山の歴史のなかで山小屋がたどった建築のいとなみについて研究を行いました。ここでは、この研究成果を、徳本峠小屋に即して説明します。私たちの研究は基本的に建物を扱います。そのため、現場に行って、建物をはかり、図面を作成し、建物の現在の姿（現形）がどのようであるかを把握することが研究の前提となります。また、建物をはかる際には、建物の柱など、個々の部材に残っている痕跡も確認します。この痕跡は、建物のある時点の姿を知ることのできる貴重な資料となります。これをもとに、建物の当初の姿（原形）がどのようであったか、また、その後どのように変化したかを復原します。

・徳本峠小屋の現形（図1・図2・図3）

まず、徳本峠小屋の現在の姿を述べます。徳本峠小屋は、木造で、壁は板壁、屋根は板葺きで、板は石を置いて固定しています。建物の内部は、宿泊室、売店、食堂、厨房、サンルーム、物置から構成されています。建物の外部には、補強のための丸太が何本もたてか

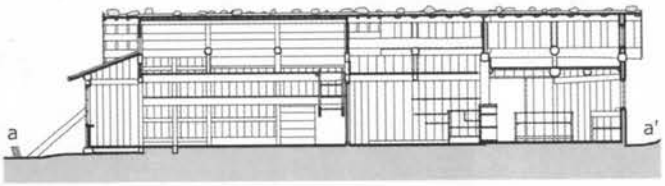

図2　徳本峠小屋 a-a' 断面図（S=1/200）

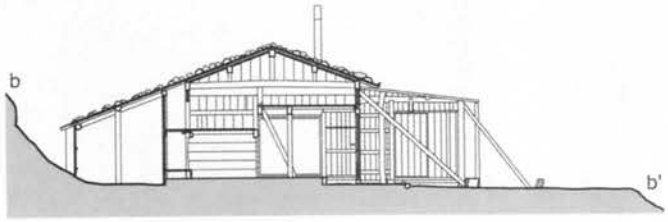

図3　徳本峠小屋 b-b' 断面図（S=1/200）

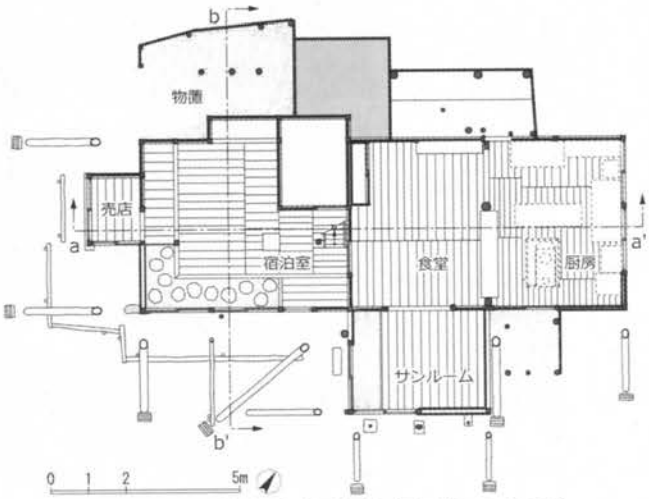

図1　徳本峠小屋 平面図（S=1/200）

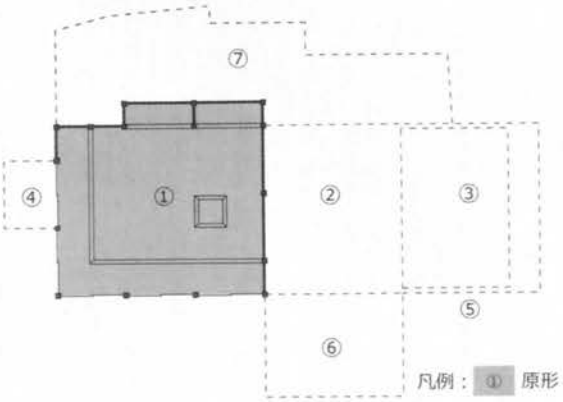

図5　徳本峠小屋 復原図（S=1/200）

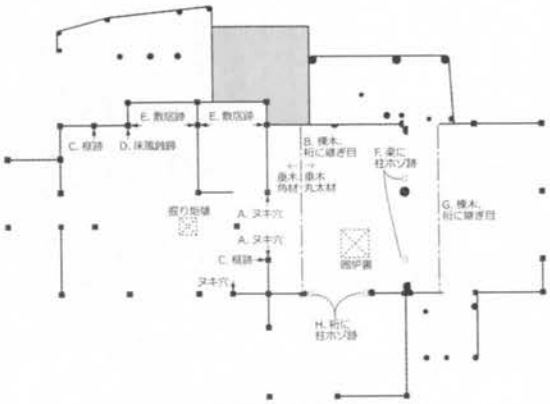

図4　徳本峠小屋 痕跡図（S=1/200）

けられています。建物のまわりには、南側に島々谷を見渡せる休憩場があり、北西に穂高連峰を一望できる広場があり、南西にテント場があります。

・徳本峠小屋の原形

つぎに、徳本峠小屋がたてられた当初の姿を述べます。痕跡A（図4）から、この位置に壁があり、痕跡B（図4）から、この位置で屋根が切れていたことがわかります。さらに、痕跡C、D、E（図4）から、かつて床は現状より高く、当時から、痕跡E（図4）の北側に二間×二尺の床の間ないし押入があったと考えられます。さらに、昭和5年（1930）以前に撮影された写真[12]などから、当初は、売店部分（図5-④）がなかったことがわかります。さらに、宿泊室の小屋組が煤けていることから、室内には炉が配されていたと推察できます。以上から、徳本峠小屋の原形は、梁行二間半×桁行三間に二間×二尺の床の間ないし押入がもうけられた小さな空間であり、その室内には炉が配されていたと推察できます。（図5-①）

・徳本峠小屋の変容過程

では、以上で述べた徳本峠小屋の現形と原形をふまえ、その変容過程を述べます。昭和9年（1934）に出版された『北アルプス』に、「徳本峠小屋 収容二五名」[13]と記されていますので、この当時、すでに原形から規模が大きくなっていたと考えられます。この当時の徳本峠小屋は、痕跡F、G、H（図4）、および、昭和46年（1971）以前に撮影された写真[14]から、原形の東側に桁行二間分（図5-②）が増築された姿、もしくは、さらにその東妻面に下屋（図5-③）が増築された姿であったと考えられます。つぎに、昭和27年（1952）頃に撮影された写真[15]と昭和42年（1967）以前に撮影された写真[16]から、昭和27年（1952）から昭和42年（1967）の間に現在の売店部分（5-④）が増築されたことがわかります。その後、厨房の改修（図5-⑤）、サンルーム（図5-⑥）、物置（図5-⑦）の増築を同時期に行い、昭和50年（1975）には現在の姿になったといいます。

・徳本峠小屋の今昔

ところで、昭和3年（1928）に出版された『日本北アルプス案内』[17]に、徳本峠小屋にまつわる興味深い広告を発見しました。この広告には、「徳本峠頂上において、著名なる雄峰穂高岳を眺め乍ら頂上小屋の名物ミツ豆や、蕎麦を味ひつつ英気を養ふには、どうしても休まねばならぬ唯一の小屋である。熱いコーヒーやサイダー及カルピス其の他食料品一切完備してあります。徳本峠頂上小屋百瀬一壽」と書いてあります。当時、徳本峠小屋では、コーヒーやサイダーやカルピスなどが売られており、ハイカラな価値を目指していたことがわかります。一方、それから80年以上がたった今日、かつてハイカラな価値を目指していた徳本峠小屋は、山小屋らしさという歴史的な価値を得たといえます。

5　山小屋における建築のいとなみ

徳本峠小屋は、炉を配した小さな空間を原形として、この原形をのこしつつ段階的に増築が行われてきました。こうした建築のいとなみは、岩魚留小屋と嘉門次小屋にもみることができましたので、山小屋における一つの支配的な建築のいとなみであったといえます。

現在、山岳には、幾筋もの登山道が敷かれ、その沿道には数えきれないほどの山小屋がたっています。近代登山が興ってから、すでに、100年以上が経過している今日、山岳という場には、固有の建築文化が息づいているといえます。山岳景観を描き続けた東山魁夷は、ドイツの古い小さな町を旅した際、あるドイツ人の言葉をかりて「古い建物の無い町は、想い出の無い人間と同じである。」という言葉を遺しました[18]。東山魁夷が、町という場に対して遺したこの言葉は、山岳という場に対してもあてはまるでしょう。山岳に、新しいものしかない場合、山岳という場で育まれてきた文化を感じることは難しいでしょう。一方、古いものしかない場合、山岳という場は、時代の流れにとりのこされてしまうでしょう。そういった意味で、山岳という場には、古いものと新しいものが混在しているべきです。

この考え方をふまえて、これからの山小屋の建物のあり方について考えてみますと、先に述べた山小屋における一つの支配的な建築のいとなみは、有意義なことを教えてくれます。山小屋の建物には、時代の変化にあわせながら、原形をのこしつつ段階的に増築が行われるという、古いものをのこしつつ新しいものを加えていく、古いものと新しいものを融合する論理が備わっていたわけです。この論理は、山小屋の建物はもとより、世界の建築文化を未来へと承け継ぎ伝えていく可能性をもっていると考えています。

本稿をまとめるにあたり、岩魚留小屋の皆様、徳本峠小屋の皆様、嘉門次小屋の皆様には多くのご協力を頂きました。末筆ながら御礼申し上げます。

注

1) 新村出編『広辞苑 第五版』（岩波書店、1998年）1917頁引用
2) 藤森栄一『かもしかみち』（学生社、1967年）29-30頁引用
3) 志賀重昂『日本風景論』（政教社、1894年）
4) Walter Weston『MOUNTAINEERING AND EXPLORATION IN THE JAPANESE ALPS』（Jhon Murray、1896年）
5) 市川健夫『日本を知る 日本アルプスと上高地』（大巧社、1998年）194頁参照
6) 安川茂雄『近代日本登山史』（四季書館、1976年）485頁参照
7) 金子博文『北アルプス山小屋案内』（山と渓谷社、1987年）と柳原修『北アルプス山小屋物語』（東京新聞出版局、1990年）に挙げられている山小屋を参考に把握した。
8) 英文は注4前掲・Weston『MOUNTAINEERING AND EXPLORATION IN THE JAPANESE ALPS』26頁を引用し、括弧内の日本語訳は青木枝朗訳『日本アルプスの登山と探検』（岩波書店、1997年）39頁を引用した。
9) 上條武『上高地 2 常念烏帽子縦走記』（独木書房、2004年）212-214頁参照
10) 横山篤美『上高地物語 ―その歴史と自然―』（信州の旅社、1981年）177頁参照
11) 堀勝彦・川村宏・小林靖彦編『三代の山 ―嘉門次小屋100年のあゆみ―』（上條輝夫、1979年）28-39頁参照
12) 熊澤正夫『上高地（登山と研究）』（刀江書院、1930年）口絵に掲載されている写真を参照した。
13) 小笠原勇八・小島六郎・鈴木勇・渡邊公平『北アルプス』（三省堂、1934年）258頁引用
14) 『信濃毎日新聞』（1971年8月19日（夕刊））第5面に掲載されている写真を参照した。
15) 注7前掲・柳原『北アルプス山小屋物語』13頁に掲載されている写真を参照した。
16) 志摩直人『上高地文学登山』（大同書院、1967年）83頁に掲載されている写真を参照した。
17) 松下元『日本北アルプス登山案内』（南安日本アルプス休泊所組合、1929年）付録頁引用
18) 東山魁夷『ドイツ、オーストリアを旅して』（同『東山魁夷全集 第6巻 ドイツ、オーストリアの旅』講談社、1115-1117頁、1979年）116頁引用

（信州大学山岳科学総合研究所・信州大学工学部建築学科　助教）

山と博物館　第54巻　第7号
二〇〇九年七月二十五日発行
発行　〒398-0002　長野県大町市大町八〇五六-一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一-二二-〇二一一
FAX　〇二六一-二二-二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL://www.cityomachi.nagano.jp/sanpaku
印刷　大糸タイムス株式会社
定価　年額　一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇-七-一三二九三

この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。